
中学校・高等学校での英語検定活用法

英検[®] (実用英語技能検定) と

TOEFL[®]系列(TOEFL[®]ファミリー)の併用

松蔭中学校・高等学校
グローバル・ストリーム(GS)主任、英語科教諭

篠原 弘樹

shinohara-h@shoin-jhs.ac.jp

1. 初めに	P1
2. 立場とマネジメント	P1
3. 課題	P1
3-1 【生徒】全体指導と個別指導	P2
3-2 【教員】教科内意識の統一、教員個別の振り返り	P2
3-3 【社会・学校】レディネスが追いついていない	P3
4. 本校での活用法	P4
4-1 実用英語技能検定とTOEFL [®] 系列の試験の捉え方	P4
4-2 担当コースでの検定	P4
4-3 TOEFL [®] 系列、定期考査、英検 [®] を組み合わせた指導	P6
4-4 教員の振り返り	P8
4-5 社会と学校：早すぎる英検 [®] とTOEFL [®]	P10
5. まとめ	P11



Danke Sehr

1. 初めに

勤務校の担当コース(グローバル・ストリーム(GS))では、英検®とTOEFL®系列(正式呼称TOEFL®ファミリー : TOEFL®一連の検定試験、Primary, Junior, ITP, iBTのこと)を活用している。併用の理由は、生徒の学力を測るのに適しているのは言うまでもないが、指導教員が指導を振り返り、担当教員間での意識を統一しやす

い部分が多い。また、改訂された学習指導要領に合う指導を行いやすいと感じているからだ。

本レポートでは、現場で指導をとる一教員として感じている課題を提示し、検定と定期考査を合わせた指導法や教員の振り返り方法を紹介する。極端な例や粗削りの部分もあるが、ある学校の取り組みとして参考になれば幸いである。

2. 立場とマネジメント

私は現在、コース主任の立場にあり、中高6年の英語指導及びカリキュラム作成、またコース全体のマネジメントを担当している。生徒の英語力を伸ばしていくシラバスや全体のマネジメントを考える中で特に意識するのは、教育の“コスト・パフォーマンス”である。金額という意味ではなく、**手軽で単純で生徒と教員にとって明確、そして教育効果が高い指導法やマネジメントのシステムをどう作り上げていくか**の部分である。いかに素晴らしい教育理念や方法があったとしても、それを実践する教員が上手くそれを活用できなければ、効果は半減である。

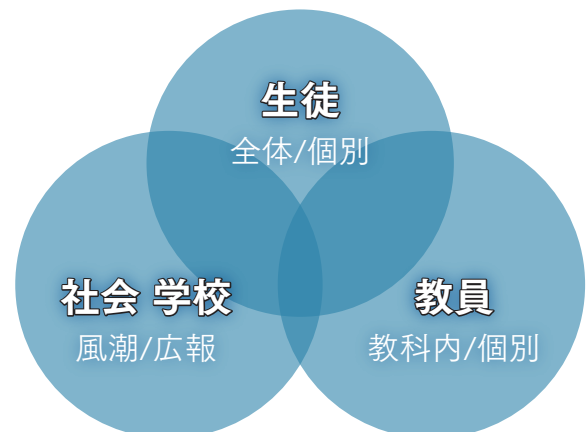
様々なところで指摘されているように教員はあ

まりにも忙しく、多様な仕事に忙殺されている。生徒だけでなく教員自身も自律した学習者になるべきで学びを常に続けるべきだと言われているが、実際にはそうなりたくても何かしらの仕事に忙殺されて、ゆっくりと時間をとれる先生が少ないのが現状ではないだろうか。そのような点を考えると、生徒の教育を考えた上で、それを伝える教育システムも同時に考え、生徒だけでなく教員自身も自律的に学べる環境を作り上げていく、極端に言う、システム的に“自律的な学習者になる”お膳立てともいえる状況、にすることが大切だと考えている。

3. 課題

英語指導及び全体のマネジメントを考えた場合、右の図が現状の課題としてまとめられる。大きく分けると、生徒に関わる問題、教員に関わる問題、そして社会・学校に関わる3つの分野の中にそれぞれ課題があると感じている。

それらを一度にまとめて少しでも手軽に、分かりやすい方法で解決できればより効果が高い教育を実践できると考えている。



※「英検」は公益財団法人 日本英語検定協会の登録商標です。

生徒

- 全体指導
大学受験対策、
実践的な英語力の育成
- 個別指導
習熟度の違い、
定着度の違い

教員

- 教科内
指導方針のズレ、
意識の統一
- 個別
指導力のズレ、
個々の振り返り

社会 学校

- 「早すぎる」風潮、募集対策
レディネスが追いついて
いない

3-1 【生徒】全体指導と個別指導

現実的な状況を考えると、中高の英語教員が、高校3年の卒業時に生徒に身に付けて欲しいと思う英語力は、

- ① 大学入試で対応できる英語力
- ② 社会/大学で使える実践的な英語力

の2つであろう。学習指導要領をみると、より実践的な力を身に付ける方向性であるの言うまでもない。ただ現実的な問題として、大学入試に太刀打ちできる力も当然身に付ける必要がある。英語を実践的に使える能力を養成しながら、筆記中心の大学受験にも対応できる力をつける。両極端とも言える目的のなかで、そのバランスを考えながら、なおかつ人格形成を促していくのが課題である。

入学時の生徒個別の問題も年々増えてい

る。例えば、インタースクール出身、家庭内の言語が英語、幼少期から英会話スクールに通っている、といった生徒が増え、中学1年生の段階から習熟度に差がある。小学校での英語授業にも差があり、入学段階から習熟度の差が年々増えているように感じている。そのような状況では、生徒各々が自分の習熟度に合わせて学習できる個別最適化や自分らしさを発揮できる課題内容などを考えなければ、英語力の高い生徒たちは授業に満足しない。そういう生徒たちへの指導はどうすればよいのだろうか。加えて、入学後に1年授業を受けると、定着度も異なってくる。全体指導を考えつつ、習熟度が高い生徒から低い生徒までの個別指導をどう系統的に捉えればよいのだろうか。

3-2 【教員】教科内意識の統一、教員個別の振り返り

教科指導で言えば、最先端の教科指導法で活躍する先生もいれば、研鑽を積み重ねて指導方法を確立している先生もいる。また同時に、分かっているもなかなか従来の板書中心の指導方法を変えられない先生もいる。教科全体を考えれば、上手くいった方法を共有して、全体の指導をレベルアップしていくのが理想だが、なかなかそれも上手くいかない。個人でも全体でも指導にズレがでてくる状況

がある。そこで必要なのは、いかに全ての教員が、簡単に、分かりやすく、「指導の振り返り」を客観的なもので振り返られるかではないだろうか。ある先生だけが上手く指導できるのではなく、最終的には全体を引き上げる方法が必要で、全員が方向性を合わせた指導法を磨いていく流れを作らなければ、上手くいったことも続かない。

加えて、指導要領改訂に伴い、より実践力

を高める指導へと移行しているが、求められている力はどのように測れば良いかと言われると、とても困るのが実情ではないだろうか。大学入試への力は、外部模試の利用でその偏差値をみれば大体のレベルは分かる。しかし求められている実践的な英語力についてはどうだろうか。指導要領に従い、実践的な力を目指して授業内容を計画し、5領域で「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性」の評価を行っても、現状では正解が見えないように思える。今は教科指導の研究会や研修に参加し、有益な

情報を得て研鑽していくしか方法がないように感じている。個人的な意見かもしれないが、私自身は試行錯誤しながら考え抜きベストを尽くしているつもりだが、どうしてもその部分に関しては、これで正しいのかと不安に思うことがある。**教員が信じて行っている指導方法が、より客観的なもので振り返られ、自分の指導の穴や指導上の「取りこぼし(弱い点や教え残している部分)」が分かるような形が作られれば、より良い教育活動が行えるのではないだろうか。**

3-3 【社会・学校】レディネスが追いついていない

英語指導に関して常に感じているのが、“早すぎる、生徒はまだその段階でない”ということだ。英検の例をあげると、実用英語技能検定はその知名度から奨学金の申請から大学受験まであらゆる場面で活用でき、持っていて損はない検定である。中学3年生や高校1年生ならば、高校入学時に奨学金、留学を考えるならば助成金や奨学金申請で活用できる場面が多いただろう。また、大学受験でも英語試験免除、加点、みなし得点といった形で利用できる場面が多く、英検®2級は高校生2年生後半までには取得しておきたい資格である。

しかし、その知名度の高さと有効活用できる点が多いことから、低学年の段階から早め早めで上の級を取得しようとする傾向がある。保護者の要望や学校の募集対策から「中学生での英検®2級の取得をすすめてください」というのは、よくある話ではないだろうか。生徒が個人で留学や奨学金申請を目的にして、個人で英検を取得しようと挑戦するのは、

目的に叶っているので良く分かるが、学年全体となると早すぎる英検級には疑問を感じている。

当たり前のことではあるが、英検®2級は高校生卒業時のレベルであって、内容もライティングのトピックも高校生向けであり、特に中学低学年では英語というより内容理解が追いつかない。合格させるテクニックやライティングで点数が出る方法を教え込む指導も可能だろうが、それは表面的なものであり、人格形成につながる教育内容になっているかと問われると疑問である。当然生徒にもよるが、一般的にはやはりある程度他教科や社会全般の知識を身に着けて、少なくとも英文内容を理解できる準備が整ってから受けるのが筋であろう。

英検®は、適切な時期に適切な級を受験するのであれば英語力を測る良い検定試験だが、生徒の成長が伴わない状態での取り組みは、教育の本来の目的を失うとよく感じている。

4. 本校での活用法

前節では、現在感じている課題を提示した。本節では、具体的に英検®や TOEFL®系列の

検定及び、定期考査を組み合わせ、それらの課題をどう解決しようとしているかを紹介する。

4-1 実用英語技能検定と TOEFL®系列の試験の捉え方

実用英語技能検定は、日本における英語の資格検定であり、学習指導要領に沿う部分が多い。英検®がエッセイライティングを導入した時点では、まだ学校側が当時の指導要領に沿う内容に対応しきれず、英検®対策(特にライティングの演習)を授業外講習で行ったものだった。しかし時間とともに学校での指導内容や方法が変わり、現在では対応できなかった部分も対応できるようになってきた。実際、本校は冬休み期間中に3学期英検®にむけて対策講座を実施していたが、現在は行っていない。理由は、希望調査をとっても生徒が集まらないためである。生徒からすると、選択問題の演習は自分でできる、またエッセイに関しても授業内で扱われているため、そこまで必要はないという具合である。生徒たちの意識をあげられていないと言えばそれまでだが、普段の授業で対策ができてきた部分が非常に大きいと感じている。つまり、**英検®は4技能5領域の指導に授業内容が上手く移行しているのであれば、英検**

2級程度であれば普段の授業をしっかりと受けていれば、合格できるものである。

TOEFL®系列は、より実践力を測る検定試験と考えている。京都教育大学附属京都小中学校の今西竜也先生のレポート：生徒が「何ができるようになったのか」を実感する機会に - 新中学校学習指導要領とTOEFL Primary®の親和性 - で紹介されている通り、TOEFL®系列の検定は、改訂された学習指導要領の部分と相関する部分が多い。極端すぎるが、逆に言えば、TOEFL®系列でスコアをとれるのであれば、指導してきた授業内容は改訂された学習指導要領の内容にも沿っていると考えている。**具体的に指導要領のどういう部分がどう相関されているかについては、今西先生のレポートが非常に参考になる。**

まとめると、英検®は4技能5領域を踏まえた普段の学校の授業に合うもの、TOEFL®系列は今の指導要領で求められている力を測れる検定ととらえている。

4-2 担当コースでの検定

担当コースでは、1年に2度、TOEFL®系列の検定を受け、英検®に関しては十分な段階を経てから目的を持って受けるよう伝えている。よく保護者や生徒からは「中学1年生から英検®準2級や2級、また準1級に挑戦し

ていきたいと思うのですが、どう思いますか」という質問を頻繁に頂く。この質問には、常に以下のように答えている。

『中学1年生や2年生の段階だと、日本語でさえ英検®2級のリーディング内容やライティ

ングの問題が理解できない部分があります。英検[®]2級は、高校生卒業時のレベルであり、扱われる内容は高校生が読んだり考えたりする内容です。受けるとしても TOEFL[®]である程度の点数をとった上で、中学2年生の後半あたりから英検[®]準2級あたりをスタートするのはいかがですか。英検[®]2級はいつかはとれる検定です。奨学金をとりたいといった明確な目標がないのであれば、無理をして低学年から先に先に進む必要はないと思います。それよりもその先の英検[®]準1級や TOEFL

iBT[®]になると、ライティングには考察力まで求められてくるので普段から世界の時事ニュースを見るなりして、価値観を広げ、教養を高めるような学習に取り組んでください。』

学習指導要領が改訂されてより高い英語力が求められているが、おおよその全体目標は以下としている。英検[®]の時期が示す矢印は、本校でのカリキュラムを踏まえた上で、受けるのであればせめてこの時期からこの時期あたりまで、また下表の●印あたりが、適切な時期という具合である。

		TOEFL [®] 系列の目標値			実用英語技能検定(英検 [®])の時期				
		Step 2	Step 2	Junior	iBT	3級	準2級	2級	準1級
中学 1年生	前半	213				×	×	×	×
	後半	216				↑	×	×	×
中学 2年生	前半	220					×	×	×
	後半	(224)	700			●	↑	×	×
中学 3年生	前半		730					×	×
	後半		760			↓	●	↑	×
高校 1年生	前半		790						×
	後半		810				↓	●	↑
高校 2年生	前半		(830)	65					
	後半			72			↓		●
高校 3年生	前半			80					
	後半								↓

当然ながら英検[®]の適切な時期は各学校の進度により変わるだろうが、英検[®]を有効活用した検定利用の高校受験や大学受験のことを踏まえると、一般的には上表●印あたりが適切なタイミングではないだろうか。い

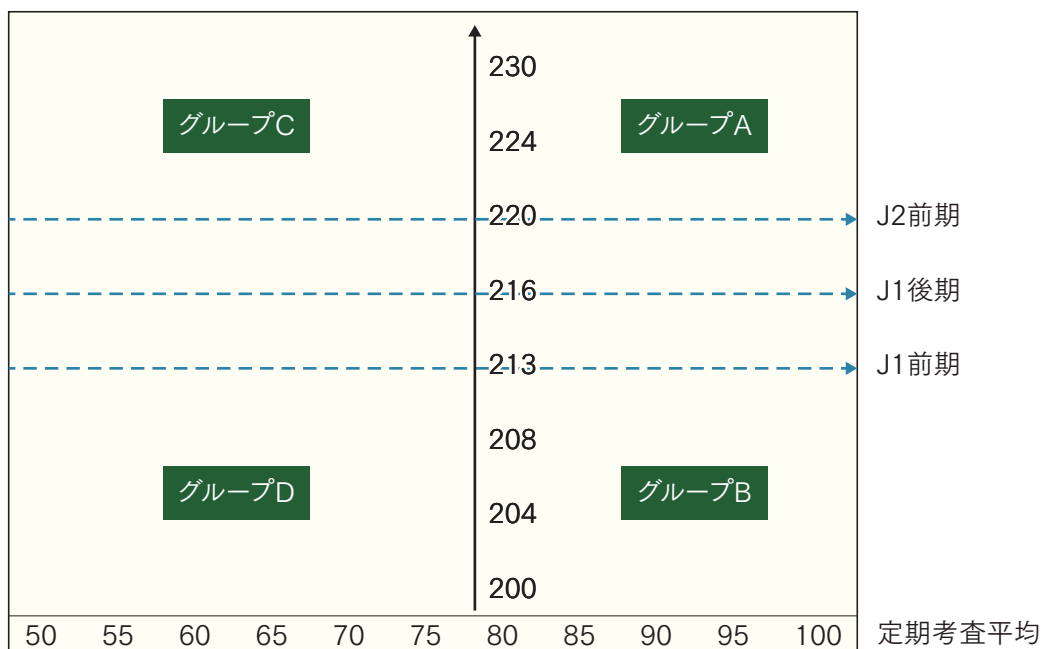
ずれにせよ、難しい奨学金獲得(返還義務がなく高額)といった明確な目的がない限り、いくら英語で日常会話を流暢に話そうとも英語以外での学力がおいつかない段階での上の級の英検[®]受験はお勧めしない。

4-3 TOEFL® 系列、定期考査、英検®を組み合わせた指導

中学2年生を例にとり、その指導法を紹介する。中学2年前期は、TOEFL Primary® Step2を受験する。その目標値は、220である。ETS から発行されるスコアレポートを参考にするのは、当然であるが、それに加えて普段の定期考査の平均値をも踏まえて、個別指導に活かしている。以下の上の表が各

自の点数、及びその学年時の定期考査平均値、そしてグループは下の表に基づく分類である。下の表では、定期考査の平均を横軸に取り、TOEFL Primary® Step2の点数を縦軸にとっている。点線の横軸が、Step2受験時の目標値である。

到達目標			Step 2	Step 2	Step 2	定期考査	グループ	
			Step 2	213	216			220
			Junior					
			iBT					
日付			7月10日	1月29日	5月28日	平均	分類	
入学年	番号	Step 2	J1前	J1後	J2前	平均	分類	
2020	1	A	222	223	226	92.7	A	
	2	B	213	216	217	97.2	B	
	3	C	226	228	228	95.5	A	
	4	D	210	212	218	66.7	D	
	5	E	224	225	225	71.3	C	



例えば A という生徒は、中学2年生の前期に226のスコアをとり、定期考査の平均値も90以上あり、グループ A という具合である。B は、定期考査の平均値が高いが、Step2の点数が目標値に届かず B グループになる。

検定の結果が返却された後には、このような指導票で TOEFL®と定期考査を相関させて、分類している。各グループの特徴は以下の通りである。

グループ C	グループ A
<p>【特徴】 学校での指導内容が定着していない。ただ、英語を話せたり聞けたりと、実践的な力はある。</p> <p>【生徒例】 英語環境(小さい頃から英会話教室やインター)で育ち、英語そのものに抵抗はないが、細かい部分まではとなるとミスが多い。スペルミスや文法ミスが多い。言いたいことは分かるが、英語的には正しくない、という部分が多々ある。</p> <p>【指導】 実践的な力がある部分は褒め、その英語の精度(正確な文法や、分かりやすい伝え方表現など)をもっとよくするために学校での学びを大切にしよう指導。</p>	<p>【特徴】 学校での指導内容も、実践的な英語力も十分に付いてきている生徒</p> <p>【生徒例】 英語に対する学習意欲が高い。学校授業も熱心に取り組み、かつ実践的な力もある。その一方で、学校授業に物足りなさを感じる生徒もいる。</p> <p>【指導】 今のペースで進めましょう。余力があり、学校授業が物足りないと感じているのであれば、個別でできる学習を進める。物足りなさを感じていそうな生徒には声かけが必要。</p>
グループ D	グループ B
<p>【特徴】 学校での指導内容も実践的な英語力も期待値まで届いていない。</p> <p>【生徒例】 学習そのものに躓きを感じていることが多い。また、英語を話すのに抵抗があったり、文法理解が乏しかったり、語彙が少ない。</p> <p>【指導】 学習意欲をなくしたり、自信がなかったりすることが多いので、まずはそのケア。その後、まずは学校の授業内容に取り組み、グループB になってからグループ A へと引き上げる。できることから少しずつ始め、自信をもたせる指導。</p>	<p>【特徴】 学校での指導内容をよく理解し、定着度も高いが、実践的な英語となると弱い。</p> <p>【生徒例】 真面目に小テストや定期考査に取り組むが、英語という科目を学び、英語という言語ツールを学ぶ意識がまだまだ。ゆっくりなら英語を理解できるが、TOEFL®の英語スピードには対処できていない生徒が多い。</p> <p>【指導】 処理スピード(速く読んだり、理解したりする力)や理解の精度(読み間違いをしない)をあげる部分を意識するような指導。</p>

TOEFL®や英検®の検定試験だけみると、その都度の成果レポートは分かるが学校の指導とどう関連するかまでは見えてこない。そこで、紹介したような TOEFL®のスコアと定期考査を合わせることで、各生徒の弱い点や強い点を客観的に見て、なおかつ生徒それぞれにあった声かけを行っていく。グループ A の習熟度があまりにも高い生徒には、手ごたえのある個別学習をすすめ、グループ B にはどういう部分に気をつけて学習してい

けばよいかを適切に指導する、という具合である。これは学年が変わる際の引継ぎにおいても有用で、どういうレベルの生徒か、またどういう指導や声掛けが必要かを引き継げるので、その後の指導にも活かしやすい。

この方法だと、定期考査をどうしているかと質問を受けるが、担当コースの定期考査では、問題量が多くあまり考える必要のない直球の問題を多く出題している。完全に「知識・技能」の部分のみに焦点をあて、当該範囲

のものがどれだけ定着しているかを測るテストになるよう作成している。「思考力、判断力、表現力等」や「学びに向かう力、人間性」は、授業内でのエッセイ作成やプレゼンテーションなど、その他の活動で測る。そして、そもそ

もの定期考査が占める学期の成績は、その学期全体の半分以下という具合である。つまり、完全に定期考査そのものは知識や定着を図る試験と設定し、TOEFL[®]の検定は実践力を測るものと割り切って考えている。

4-4 教員の振り返り

学習指導要領が改訂されて教員は、それに準ずるよう指導を実践しているが実践力を鍛える内容になっているかと不安になることがある。そこに関しては、極端に言えば、TOEFL[®]で点数をとれるような授業にすることである。TOEFL[®]系列が改訂された学習指導要領と相関し、そこで点数がとれるのであれば、指導要領に従い実践的な力も身につけているということである。

英語科教員全体に「学習指導要領にあった授業内容で実践的な英語力をつけてください」というのと、「この学年の目標値は、ここです。生徒たちがこの目標に到達するよう指導してください。」というのであれば、明らかに後者の方が取り組みやすい。点数をとるという目的で、英語指導を行えば、それは学習指導要領の考えにも基づくものでもあるというわけである。少なくともまだまだ改訂された指導要領に順ずる指導が発展段階にある中で、指導要領に沿った授業を適切に行うには、この伝え方が、現場の教員へ指導の方向性を適切にかつ簡単に伝えられる一番の方法だと思う。

教員は、実力考査や外部模試を利用して、

その振り返りをしてきた。方法論としては、それと同じであり、先生方にとっても馴染み深い方法である。実力考査で、長文読解ができていないのならば、長文読解を演習する。それと同様に、〇〇のスキルが弱いなら、そのスキルを磨くトレーニング(実践演習)をするという具合である。目標が明確になれば指導については、教員は普段の工夫でゴールに向かっていける。そのような方法で、教員全体の指導力をあげ、高い教育効果を作り上げていくことが、現時点での理想と考えている。つまり、生徒たちのTOEFL[®]のスコアによって、自分の指導が学習指導要領に順じているかどうかを判断し、指導法を磨いていくというわけである。

具体的な振り返りとしては、まず、全体の振り返りとして、どうやってグループA以外の生徒たちをグループAに届かせるかである。グループA以外の生徒でリスニングやリーディングの平均をとり、その平均値からどういう指導方法が効果的を考えるとという具合である。そこでは、京都教育大学附属小中今西先生のレポート：TOEFL Primary[®]スコアレポートを受けての学習指導例がとても参考になる。

指導例 リーディングスコア110-112 Lexile 550L 生徒のアドバイスや指導例（今西先生のレポートより）

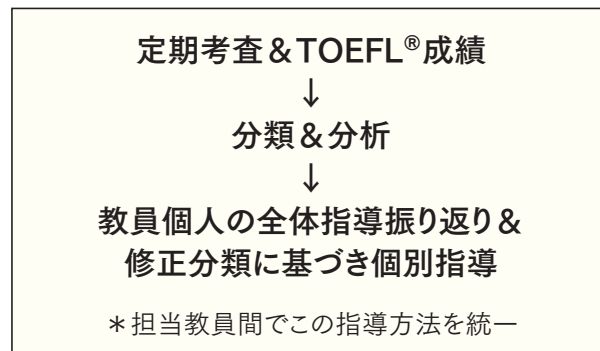
TOEFL® Primary Step 1 / Step 2 学習・指導例 リーディング

各レベルに該当する標準的な生徒へのアドバイス	<p>◆様々なテーマの長い複雑な物語や文章を読みましょう。</p> <p>◆物語や情報を読み、その内容を自分のことばで話したり書いたりしてみましょう。</p>
学習について	<p>☆ある程度の長い文章を読むことに慣れるため、物語のほか社会や理科に関する本を、写真やイラストも参考にしながら読みましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●物語や自然科学に関する本や伝記で、特にLEXILE 450Lから650L程度の本をたくさん読むことが大切です。 ●本を読むときは、わからない語があっても止まらずに読み進めましょう。辞書を使う際には、最後かキリのいいところまで読んでから分からない語を調べましょう。 ●インターネット等で内容を調べて読んだ内容と合っているのか、どの部分にそのことが書いてあったのか等を見つけてみましょう。
指導の例	<p>読みながらわからない語や部分に線を引いて、止まらず全体的に内容理解を深めさせる。</p> <p>身近なものばかりでなく、今まで興味がなかったテーマや、自分の生活においてあまり触れることのなかったような場面の物語を読ませます。その時になじみのない語や表現に遭遇し、止まってしまうがちですが、前後の文脈や即知の情報で対応できる力もついてきているはず。洋書を読ませ、わからないところで止まらずキリの良いところまで読んで、「こんな意味がなあ」と考えるような習慣を身につけさせましょう。</p> <p>新しく知った語を集めてオリジナル単語リストを作らせる。（ジャンルごとに分けてもよい）</p> <p>わからない語や表現をいちいち調べていると大変疲れます。また、抜き出したものを見返すときにあまりにも多いのも気が滅入ります。わからないからと言って全部調べるのではなく、読んだ後にまだ気になる語だけを調べさせ、リストにしていくとよいでしょう。</p> <p>読んだ本について、友だちへの本紹介や感想を記録させる（新しく知ったこと、理解しにくかった内容等）</p> <p>英語の力にあった本や文章を読ませ、それを紹介したり感想を書かせたりすることで、話の概要や重要な部分を把握する力が付きます。紹介や感想のために本や文章を読み返すことも、重要な部分を適切に把握する力となります。また、インターネットや日本語の本、インターネット等で内容に関する情報を調べて、自分の理解が正しかったのかを確認することもよいと思われます。</p>

この今西先生がまとめられているリーディングやリスニングの学習や指導例リストをみて、対応するスコア生徒を頭の中で想像すると、確かにそういう部分はまだできていない。できてかなり時間がかかるだろうと振り返ることができる。そんな視点で平均スコアをみると、確かに最近の自分の指導は〇〇に偏りすぎていたかも、〇〇のスキルは弱いかもといった具合に振り返られ、今後の授業にも活

かすことができる。そしてその後は、各グループの特徴を踏まえた個別指導へと進めば良い。グループAのあまりにも英語力が高い生徒には個別の学習を進め、グループCにはより正確な英語を身に着けるような指導である。そのようにして、教員は全体指導の方向性を修正し、なおかつ個別への声がけや指導を行うことで、クラス全体を上手く導いていく。

また、この基準ができれば当然、教員間での方向性をも合わせやすくなる。それぞれの教員がそれぞれの価値観で行うのではなく、分類と指導法を活用し、TOEFL®の目標値と定期考査の目標値を達成するグループAの生徒を多くする。そういう共通理解がスムーズにできるのが大きなメリットである。



4-5 社会と学校：早すぎる英検® とTOEFL®

前述の通り、英検2級までであれば、英検®は中高の学校授業の延長で合格することができる。ただし、低学年で先に先に上の級を取得しようとしても、英語以外の学力が追いつかない。高額な返済義務のない奨学金を取得するためといった明確な目標がない限りは、焦らずに生徒の成長を待って、英検は受験した方がよい。

紹介したTOEFL®と定期考査を組み合わせた指導では、この早すぎる英検®の問題も解決できる。TOEFL®系列を使えば、step 2は小中学生向け、Juniorは中高校生向けの題材で設定されているので、その内容が上手く学齢に合う。英検®2級でいうならば、中学2年生が高校生の内容で出題される英検®2級に挑戦するよりも、中高生全体を対象としたTOEFL Junior®に挑むほうが、内容面に対応できる部分が多い。**レディネスが整わない状態で受けるものより、当然、その学齢に応じたテストを受ける方が正確に英語力を判断できる。**

中学3年生の後半ともなると、他教科の知識も身につけていく。個人的にはそのぐらいからやっと英検®2級のリーディングやライテ

ィングの出題意図を理解できる準備が整うのではないかと感じている。だからこそ、早めに受けるのではなく、準備ができてから受けてはどうですかという具合である。

加えて学校側での問題であろうが、英検®のみで生徒の英語力を測ろうとすると、どうしても“無理をさせる”生徒がでてくる。ある意味、これもレディネスが整わない早すぎる英検®を助長してしまっている部分とも考えられる。例えば、学校で英検の一斉受験を行っていたとする。そうすると、中学入学前に英検®3級を取得済の生徒は、1年生で英検®準2級を受ける。学校授業は中学1年生の内容で、準2級と関連する内容がなく、高校生の英文法も学習していない。そんな状態で、無理をして受けることになる。そういう問題が起ってくる。本校でも幾度もあった。しかしTOEFL®を利用すれば、実践力を養う部分で学校授業と関連し、なおかつ内容は生徒が対応できる題材である。TOEFL®を利用すると、この問題も解決され、より効率的に生徒の英語力を把握できると感じている。

ここまで言うとなんか英検®を否定しているようだが、否定しているのではない。英検®は日本

の英語検定であり、学習指導要領に沿い、大学入試にも近い。そして、普段の学校の授業の延長で合格できる。色んな場面で有効活用できるメリットがある。中学1年生が、1年生のまとめとして5級を受ける、3年生がまとめとして3級を受ける。そういった“振り返り”として活用するのであれば、身に付いた英語力を適切に測るという意味合いでとても有用

である。ただ、無理をして先に先に級をとるような形や、習熟度が異なる生徒が増えてきた状況を考えると、普段の定期考査とTOEFL®系列を活用しながら学齢と指導要領に沿う形で英語力を測り、必要に応じて準備が整った段階で英検を取得していく方が理に叶っていると思う。

5. まとめ

本稿では、現在感じている課題を提示し、それをどう英検®やTOEFL®系列そして定期考査を活用して解決しているかを紹介した。TOEFL®系列に定期考査までをも組み合わせると、生徒個別の指導や教員の全体指導振り返りにもつながり、教員間での指導の方向性を合わせやすくなり、学習指導要領にも沿った授業内容を実践しやすくなる。

現場の一教員として思うことであり、言い過ぎている部分、それは違うという部分も多々あるかと思う。ただ、学校全体として指導要領にのっとり生徒により良い教育を与えたい、教員一人の力ではなく、教員全体がチームとして取り組み、生徒を伸ばしていきたい、それだけを一心に考え、作り上げたものである。取り組みとして、何か少しでもご参考になれば幸いである。

引用資料

京都教育大学附属京都小中学校、今西竜也先生のレポート

- 生徒が「何ができるようになったのか」を実感する機会に - 新中学校学習指導要領と TOEFL Primary®の親和性 -
- TOEFL Primary®スコアレポートを受けての学習指導例